

# トランスジェンダー学生の受入れ お茶の水女子大が決定！

2020年度の学部・大学院の入学者から実施

旺文社 教育情報センター 2018年7月13日

7月10日、お茶の水女子大は記者会見を開き、2020年度から実施するトランスジェンダー学生（戸籍上男性であっても性自認が女性である学生）の受入れについて説明した。

施設や体制の整備、手続きなどについての詳細はこれから検討していくとのこと。本記事では、記者会見にて語られた、決定に至るまでの経緯や今後の流れなどについて、その概要をまとめた。

## ●受入れ決定までの経緯

お茶の水女子大では、2016年からトランスジェンダー学生の受入れについての検討をはじめ、ワーキンググループを立ち上げた。検討開始のきっかけとなったのは、大学に寄せられた問合せだった。また、背景となったこととして、2014年からの、アメリカのミルズ大学をはじめとする女子大学におけるトランスジェンダー学生受入れの動き、および2017年9月29日の日本学術会議提言「性的マイノリティの権利保障をめざして - 婚姻・教育・労働を中心に -」を挙げた。

その後、学内での話し合いや同窓会などでの説明のなかで合意形成を図り、6月下旬の役員会にて決定した。これまでに、教員や職員、同窓会での説明は20回、学生に向けては3回の説明を行っており、前向きの反応を得ている。対応や準備体制についての懸念はあるものの、受入れるという方針自体に対する異論はなかった。なお、今回の発表に対する反応も、海外からも含め、好意的と感じているようだ。

## ●質疑応答

以下に、質疑応答のなかで説明のあった主なポイントをまとめた。

Q. 確認方法は？

A. 出願期間の前に別途、申し入れをしてもらい、情報が漏れぬよう配慮した上で、相談の案内をする。その際、書類提出や意志・希望の確認を行う。

トランスジェンダーは性同一性障害よりも広義で、医師の診断書が必ずしもあるものではない。第三者による書類が欲しいところだが、本人の書いた書類での確認もありえる。さまざまな方策が考えられるが、いずれも、詳細はこれから検討する。

Q. 性自認が男性の場合は？

A. これまでも、入学後に性自認が男性となったことはあった。その学生を退学にはしていない。そういった生徒の相談窓口はある（指導教員、学科によっては担任制をとっている）。

Q. 施設等の整備は？

A. お手洗いについてなども含め、検討している。学生が心地よく過ごせるように整備していく。さらには、留学を考えたときに、先方の受入れが可能なのか、といったことも含めて検討中だ。

Q. 共学化については？

A. まったく考えていない。20～30年後、社会が大きく変わったらありえるかもしれないが、10年後に、といったことはない。現状、女性が男性と同等に、社会で活躍しているとはいえない。アンコンシャス・バイアス（無意識の偏見）が存在している。

生物学的にも医学的にも、性には多様性があるとされてきている。男性・女性という区別の困難さは認識している。今後どうあるべきか、議論をしたこともある。しかしながら、今回の件で、女子大学の存在意義を問う議論は出てきていない。

Q. 他大学への波及については？

A. 2016年ころから他の女子大学と情報交換をしてきた。奈良女子大、津田塾大、東京女子大、日本女子大とともに活動をしている五女子大学コンソーシアムにおいても、今回の件で情報交換をしている。おそらく、他大学での取組みも促進されるのではないかと。

Q. 附属高校や聴講生などについては？

A. 附属高校での受入れは考えていない。高校受験の段階では、その後に性自認が変化する可能性がある。聴講生や研究生、留学生については、すでに男女とも受け入れている。

## ●今後について

これまでは入学資格を「女子」とし、問合せに対して「戸籍上の性」と説明していたのを、2020年度より「戸籍または性自認が女子」とする。編入については2022年度から実施する。

今後はワーキンググループのメンバーを拡大し、受入れ委員会を設置、詳細を検討するとともに、2018年度末までにガイドラインを作成する予定。さらに、これまでも行ってきた説明会や研修は、続けていく予定だ。

会見では「対応が遅いのではないか」との声が上がり、それに対して「検討を重ね、女子大学においてどのように受け入れるかを考えてきた。議論・返答にも時間がかかった。これから、温かく受け入れる。遅かったかもしれないが、ご容赦いただきたい」との返答があった。「女性が無意識の偏見から解放され、自由に活動できるのが女子大学。性自認が女性である学生が、女子大学で真摯に学びたいとすれば、受け入れるのは当然だ」という室伏学長の言葉が響いた。